

第34回全日本、「みのお」に集う！

2008年3月30日 第34回全日本オリエンテーリング大会 大阪府箕面市



全日本は12年前に奈良県のトレインで大阪府主管として開催していますが、当時を知るメンバーも減少・高齢化し、全日本が本当に開催できるのか、自分たち自身でも危惧していました。

しかしながら、そのころちょうど全日本リレーへの大阪府チームの取り組み姿勢が、所属クラブを超えて団結するチームに変わってきた府協会の存在を所属員が意識し始めたこともあり、トレインへの注文がなく（京都府が東山で実施したことは、箕面への道を開いたこととなります）運営も身の丈にあったサイズで自由にやらせていただくといった条件がクリアされるのならということで、新生大阪府協会の前途を祝う意味もこめて開催となりました。

その結果、今回の全日本は、エントリー受付事務を含めて主管者に実務面がすべて任せられた初めての全日本となりました。

西の「田中徹」、楠見耕介！

地図作成については、責任者を楠見耕介氏（大阪 OLC、和歌山県協会）に依頼。延べ10名の調査者の配置、調査計画の策定、推進、作図、コース図印刷手配を一手に引き受けていただき、そのつど発生するいろいろな課題に対しても適宜的確にそれらを克服してくださり、その結果、地図関係作業が大会準備に支障をきたすことがなかったことが、この大会の一番大きな成功要因であると思われます。地図作製が順調に進んだことで、瀧川コースプランナーがほぼ毎週トレインに足を運んでコースプランニングに熟考を重ねることが可能となり、村越 JOA 専務理事から「急峻なトレインでも、いい地図があれば、オリエンテーリングを楽しめる」との見本のような大会でした。」とのコメントをいただきました。

参加者数目標 800 名に及ばず！されど大阪の伝統、「堅実運営」は健在！！
運営全般からみた全日本！

12年ぶり 大阪全日本！

第34回全日本大会に参加された皆様、ありがとうございました。事前エントリーは698名と主催者（JOA）目標の800人に残念ながら到達できませんでしたが、インカレが関西で開催さ

れたことや、OL人口密集地の関東からみれば遠征になること等を考え合わせると健闘した数値かもしれません。しかし学生参加者がわずかに46名。前回に続く学生の全日本離れ傾向は、2週間前のインカレが540数名を数えているだけに残念であり、気になるところです。

さて本大会は、いわゆる公認大会のブロック別開催順にあっているというところから始まりました。

当時大阪府の組織は、委員会から協会を立ち上げたところの移行期であり、



地図作成者：楠見耕介

機能化と効果的な準備！

一方事務面では、阪本博実行委員会事務局長を中心に横田広報担当チーフがそのもてる能力をフルに発揮され、主催者であるJOA事務局側との連携もとられ、これら2人のおかげで早期のPR開始、要項配布、プログラム作成と余裕を持った対応が可能となりました。

12年前に比べ、携帯電話はもとよりメールソフト、インターネットブリーフケースの普及、手動パンチチェックから電子パンチへ、そして製図ペンでの作図からOCADによる作図、GPSによる調査など、当時としては夢だった機器が現実のものとなりそれらの活用によって大会運営自体が大幅に省力化され、トータルで大会運営の負担が軽減されたことも見過ごせない成功要因でしょう。

しかし今だからいえる話ですが、メール、ブリーフケースの活用は非常に便利なのですが集中すると、その内容の整理、記録と記憶が大変で、さすがに辟易し、何らかの良い方法を見つけなければと思っているうちに大会が終了してしまいました。

早期対応が鍵！

実行委員会組織は、前年2月から中核部を形成。地図調査を先行する形で進め、同時に調査者・運営チーフのメーリングリストをそれぞれ立ち上げ、チーフ会議は9月から本格的に始動、以後ほぼ月1回ペースで開催。11月後半からの要項配布をめざし、その11月からは役員全体のメーリングリストを立ち上げました。役員全員そろっての全体会合は2月3日、全体試走会は10月と2月の2回、OCADだから地図修正も以前に比べ日程的にも楽に進めることができました。チーフ会議は誰でも参加できる形式で進め、各チーフからそれぞれのパート所属員へ連絡をまわしてもらうようにするとともに、担当業務のマニュアルを作成してもらい、それをプログラム原稿と並行チェックしつつ進めました。

こういった諸準備も参加者数、コース数が具体化するまでは、大会の全体像がなかなか描けないため、各チーフとも苦労することとなりました。また、今回はトレインが非常に都心部に近く交通の便がよいということ。いろいろな紆余曲折がありましたが、会場となる小学校が確保できたこと。役員用宿舎も1984年度インカレ以来OLを良く知っている宿舎が、秋に開通したトレイン直下を貫通するトンネルにより

利用しやすくなったことといった総合的な利便性の良さも、会場・スタート・フィニッシュが分散したにもかかわらず、円滑な運営が可能となりました。

ネックとチェック！

大会運営直前の最大のネックと我々が覚悟していたのがコース印刷でした。

オンデマンド印刷はプリンターの処理能力により印刷時間が非常にかかるとともに、IOF指定色を出すためにその調整等のため、どのプリンターでも印刷可能と言うわけに行かず、こればかりは個人の能力に頼るほかなく、前週の土・日、役員用宿舎で印刷しつつのコース図セット作業を徹夜も含め覚悟していたのですが、3人の強力なコース印刷担当者による並々ならぬ努力により、作業予定日までに印刷がほぼ完了し、以降の作業が大幅に短縮されたことは特筆に値することでした。

そのうちの1人が作図した地図が、南の主要道路が削除されてしまっており緊張しましたが、競技に支障がないということで、公式掲示板での対応となり、結果的にレア物の価値がついたようですが、ご愛嬌ということでお許しください。

このほか計算関係も膨大なEカードデータを河合淳・計センチーフが1人で作成するとともに、いろいろな事例の想定と対応までを、フィニッシュの永瀬チーフと連携して取り組んでいました。

またナンバーカード、レンタルEカードといった重要な配布物を参加者に渡し、文字通り大会の窓口となる受付も奥田チーフのもととさまざまな状況での対応訓練とチェックを繰り返しました。

そして競技直前対応のキーポイントとなるスタートでは、辻村歩、土屋という強力なリーダーシップのもと最後の最後まで、出走およびコース図にミスがないように徹底的にチェックをしていました。

救護は、急峻なトレインのため、救護所を利用された方も9名に達し、特に手関節を骨折された方が出たのには残念でした。

さらに、これは当初想定されていなかったのですが、実行委員会側でもドーピング検査用にシャペロンと呼ばれる通告・誘導係を確保しなければならなくなり、みんな経験がないことと、実質上シャペロンはその業務にはいると他の業務ができなくなるため、人員配置調整には各パートから協力を得つつも、頭を悩ませることとなりました。

このように今回、各パートともチーフ・サブチーフを中心に各運営者が全日本大会の成功への意識を高め、機智に富んだ柔軟な対応ができたことは、今後のことも含め大きな財産となりました。

大会運営は、サービス業？

大会が大きくなり、参加者が多くなれば、考え方の異なる人々も増えるわけで、世にいうモンスターペアレントならぬモンスターオリエンティア的な方も登場し始めました。

たとえば、スタート時間を自分たちが申し込んだ安いツアーの便に間に合うように調整してほしいという参加申込とか、自分はBクラスの最終コントロールから誘導と人の流れに従ってきたのにEカード読み取り所に来てしまったと怒るランナーとかがありました。

またスタートでも、大会によってその方法が若干違うせいもあるかもしれませんが、アクティベートに関する基本的なEカードの操作方法をご理解されていないランナー等々が発生しました。

これらは常識的な見地とプログラムに普通に目を通していただければ、事前にご理解していただける事項であると思うのですが、誘導方法についても、現地で途中から誘導テープの種類・色が変化しているので気づくはずなのですが、申し出人様におかれては怒り心頭になってしまい、残念ながらそれらのことによくご理解をいただけないようでした。

さらには本部に対しタクシーを呼んでくれという依頼もあったりし、プログラム送付についても、表現は郵送となっているのですが、実際には経費節減の観点から宅配メール便を使ったところ、引越しされている方がおられ、郵送は引越し先へ転送されるが、宅配メール便ではそのサービスがないため届かず、その参加者が苦労された結果、今後そういったことのないようオリエンティア全体への注意が促されたりしました。

便利になると思われ落とし穴があることも改めて気づかされましたし、説明をいくら明記しても、読んでいただけないのなら、何のためのプログラムなのかとの疑問も生まれました。参加者からの要望、要求レベルの向上から見た場合、大会運営自体がサービス業化していつているのではないかとひしひしと感じました。

堅実運営とリスクマネジメント

今回の大会は「やるべきこと、できることを確実にやる」を目標とし、全日本チャンピオンを決定するのにふさわしい競技を、われわれの持てる能力・身の丈に応じた最良の形で提供できるように準備してきました。そのため方法は他にあったかもしれませんが、我々のレベルではそれにとらわれると競技運営をおろそかにしかねない「魅せるOL」的な演出はほとんど手つかずとなり、大会の印象は地味にならざるを得ませんでした。

スタッフ人数は主催者JOAから矢板の50名台を参考にとアドバイスされたことや、また収支的に当時抱えていた協会の財政特殊事情やスタッフの全体的高齢化もあり、運営スタッフ数は結果的に約60名となりましたが、本大会が世界選手権代表選考会も兼ねるということにもなり、少数ながらも運営者サイドが原因のミスを起こしてはならないとの意識徹底のもと、確実な運営に重点を置き、2重3重のチェックを実施しました。

しかし競技運営に致命傷となるまでには至らなかったものの、前述の主要道路削除（これは普通では考えられないことなのですが、疲労の蓄積から起こりえないことがおこるもので、コース図印刷はどうしても個人に任せきりになるため、防ぎきれなかったことは残念です）のような小さなミスは無くしきれませんでした。「人間はミスをするものである。だからそのミスが起きないように仕組み・体制を作る」というリスクマネジメントの難しさを改めて感じました。

背広姿のランナー？

最後に1つ逸話を少々、当日は韓国のOL協会の会長が来られましたが、この方が外交官の大使級の方ということで、気を利かせた大会運営スタッフが警察へその来訪を事前連絡したところ、警察側が恐れ入ってしまい、警察側から事前に訪問者の詳細データほか当日の行動予定をチェックされたばかりか、当日は雨天にも関わらずその会長がスタートへ行かれたということで、スタートまで私服警官が警護・警備のため背広姿で上っていくということもありました。

そのほか駐車場のチェックも行われ、おかげで緊急連絡先の私の電話に一番多くかかってきたのは警察からの電話だったという一幕もありました。

すばらしきかな大阪府！！

いろいろ細かなことをあげていくとキリがありませんが、地図作成、コースプランニングといった競技面、そして事前の事務処理・当日の運営がうまく機能し、おおむね及第点を与えていただけの大会を提供できたのではないかと思います。

この文章が今後の参考になれば幸いです。ご質問等もお寄せください。それでは今後とも大阪府OL協会をよろしくお願いいたします。

(野澤建央)

写真の見栄えがよくなります。また、幕の高さは、身長+30cmぐらいが良いそうです。



三つ目。今回、協賛品の飲料は、フイニッシュで配布せず、会場に戻り、Eカードの読み取りをしてからの配布としました。これは、参加者の皆様に速やかに会場の計算センターでEカード読み取りをしていただきたかったからです。(Eカード読み取りが遅くなると表彰者の決定が遅れる)ただし、救護の観点から給水が必要な場合もあるので、救護用品として飲料水は準備しました。

(フィニッシュ担当:永瀬)

全日本大会フィニッシュ運営記

(永瀬)

本大会では、フィニッシュ地区に制約が大きく、最終コントロールから下りで勢いがついたところでの鋭角ターン、狭いフィニッシュ地区、Eカードの読み取りは離れた会場など参加者の皆様に、何かと負担をおかけになりました。ご協力ありがとうございました。

せっかくの機会なので、今後の大会の運営の参考になるのではないかと思います。書くことを書かせていただきます。

一つ目。パンチングフィニッシュについての経験がなく、まごつかれる方が少なからずいらっしゃいました。オリエンテーリングの経験があまりない方だけでなく、久しぶりの大会出場で、Eカード初めてという方もいらっしゃいました。

プログラムには、「全クラスともパンチングフィニッシュ方式です。フィニッシュユニットにパンチをした時点で競技終了となります。フィニッシュ位置で確実に停止し、ユニットにEカードをセットしてください。フィニッシュユニットは複数ありますが、どのユニットでも同じです。」と記載したのですが、もう少しわかりやすい書き方があったのでしょうか。また、会場では、Eカードの説明コーナーがあった方が良くもありません。

二つ目。記録担当の上林さんより、フィニッシュ幕(予算の関係で、従来のゴール幕を使用)は、2枚使用して、どちらからも見えるようにした方が良くと教えていただきました。こうすると、片側はフィニッシュする参加者に向けて、もう片側はフィニッシュする参加者の写真を撮ると、バックに写って、